

北社会ニュース 11号

2005-4-20

発行：鈴木壮夫

今年の桜前線はやっと仙台に到着、母校の老木も満開だそうです。春爛漫の便りと共に、先月講演いただいた高橋宏明氏（高11回）が東北電力社長に昇格との記事を各紙が報じております。数年前より次期社長候補NO・1と聞いておりましたので、「ご苦労さん」とうのが同期生の大多数の励ましだと思います。仙台での同期会（北陵ピンピン会）は一・二高定期戦の前日5月13日です。当日盛大なエールを浴びせようと思っています。

来月以降の講演予定

5月18日（水）

講師：齋藤敏一氏（高15回）（株）ルネサンス 代表取締役社長
「今やシニアのものになったフィットネスクラブ」

6月15日（水） 第二回会員によるスピーチ

講師：白崎敬治氏（高12回）ともう一人（未定）

中国・反日デモ

私は共産党と宗教政党は嫌いで、消滅を期待しているというのが正直な心です。ですから中国共産党に対しても「当事者能力も発揮できない。ざまあみろ！」となります。毛嫌いしている小泉首相がニヒル(?)に笑い、「大局的に・・・」と発言しているのをTVで拝見、ひょっとしたら「大物」と錯覚しかねない。デモ隊が叫ぶ「小日本ーシャオリーベン」は実体を正確に表現した言葉ではないのか。中国各地で、多くの若者が反対をアじる「相手国」が日本でよいのか、他の国ではないのかと同情したくなる。共産党一党独裁での体制維持は相当ムリが生じているのだろうと思う。しかし、13億人が毎日食べて、排泄する。基礎的な生活を支えていく社会規範が強くなければならない。そして、唯我独尊の国民性、上から押えこまねば「国」の統一も危うかっただろう。しかし、1949年中華人民共和国を成立させてから56年を経る。もう「純真・ひたむきさ・人民のため」は過去のものになりつつある。わざわざ中国まで集団買春に行く、バカな日本人も多い。20年前「安かろう悪かろう」が急速に改善され、十分の一(?)の低労賃を求めて中国進出する企業も多い。隣国だからこそ、特殊な歴史の経緯がある。だからといって、相互に独立国家同士、深刻な暗い現実部分を論じることを避けてはならない。毅然として堂々と背筋をぴんと伸ばし、個人も自分の意見を相手の「眼」を見て発言すべきなのだと思う。「擦り寄る」ことは自滅に繋がるとも思っている。

三連勝世代 — 「杜の都の早慶戦」から「神宮の早慶戦」へ

ソニーの中鉢良治氏が先月の北社会（3月16日）当日、日本経済新聞・交遊抄に「三連敗世代」を寄稿していた。その記事を数人の会員がコピーして北社会に持参して紹介してくれた。小さいことではあるが、こういう善意が会を盛り上げると私は感謝し読みました。私達世代（高11回）は「三連勝世代」という全く逆の幸せな世代でした。ほぼ、半世紀も昔のことになりました。でも、中鉢さんも書いている通り「不思議と時間の隔たり」は感じません。上杉山中時代、ボーイスクートの先輩諸兄を見て、「高校は帽子に白線が付いているところではなければ」と憧れていたのが、入学から一ヵ月応援練習にも少しも抵抗なく、嬉々として唄い、手を叩いていました。そして、定期戦当日、便所のコンクリートの壁に飛沫が飛びかう程の放尿をしながら、連れションの上級生達から「今日は勝つぞ！」と喝を入れてもらったものでした。

一年生の夏、福島・山形・宮城三県（南東北？）の頂点に立ち、甲子園出場を成し遂げたのだから二高は強豪チームだったが、一高も強く、「力」は拮抗していた。二勝一敗で辛うじて二連勝した。三年生になったら、早坂-佐藤という強力なバッテリーが入学してきて、あっさり勝った。私はプラスバンド部でトランペットを吹いていた。楽しかった。三年間とも全て評定河原球場だった。高等裁判所の裏手の崖の石段を女高生が次から次へと降りてくるのが見えた。三年生の時、プラスバンド部も20人位になり、優勝パレードの先頭で仙台駅前経由定禅寺通りを西に向かい澁橋を渡って母校に戻ったような記憶がある。「杜の都の早慶戦」とも言われた。どちらが早稲田でどちらが慶応かも同級生間でよく話題になった。多くの同級生は慶応を嫌っていた。

私は一浪して慶応に入学できた。商学部という新しい学部だった。夏休み帰郷中一番町で東北大・経済学部の先輩に会った。「そうか、慶応は仙台商業と同じような勉強をしているのか、経営管理なんて」とバカにされた。「マル経」全盛だったのだ。60年安保のデモ参加で春の「神宮の早慶戦」は行くことができなかった。秋は歴史に残る戦いになった。リーグ戦は二勝一敗で早稲田が勝ち、勝ち点・勝率とも慶応と並んだ。優勝決定戦が始まり二試合引き分けリーグ戦から数えて六戦目に早稲田が勝ち優勝した。

二学年上に、二高出身の島津さんが慶応の、一高出身の石黒さんが早稲田のレギュラーで共に外野を守っていた。当時は打席に選手が入るたび、出身高校がアナウンスされた。

「仙台一高」「仙台二高」、神宮で聞いていて響きがとても良かった。連日六万人の大観衆だった。60年安保の挫折感を抱いた多くの学生が六連戦を通して、デモとは異なる連帯感を抱いたのではないだろうか。そして、その間米国ではケネディが大統領に当選した。43才だった。たかが、「学生野球」かもしれない。それも、応援団の一学生に過ぎない。しかしあの熱い緊張感を体験することがもう巡ってこないと思うと残念に思う。しかし、「三連勝世代」を過ごせたことが青春の支えになっていたのも事実、感謝！